

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.98
2011.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

縄文の使用痕

—石器と先史時代の生活がもっと明らかになるために—

第21回

異形石器

今回は異形石器を取り上げます。鈴木克彦氏が異形石器について、ある道具を意識した石器と考えています。実際に使用痕らしき痕跡がみられる場合があります。そこで光沢・摩滅と、鋸歯状加工の2点に着目して異形石器について考えてみます。

1. 図1は異形石器の表面にみられた光沢(写真1)です。顕微鏡下でDタイプ光沢(写真2、角・骨主体で生じる光沢)が確認されています。

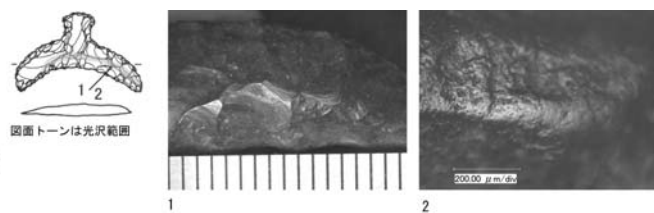


図1 三内丸山遺跡異形石器 第91号埋設土器より出土

表面に摩滅がみられる事例は、各地に確認されています。齋藤岳氏によって三内丸山遺跡の黒曜石製石器にみられる摩滅が集成されています。中部高地では、長野県東畑遺跡、中村中平遺跡、山梨県酒呑場遺跡の黒曜石製石器表面に摩滅が確認されています。

江坂輝弥氏は『先史時代Ⅱ縄文文化』(日本評論社)で、異形石器が骨角器の製作道具ではないかと推定しています。ただこうした資料は、器体中軸に光沢や摩滅がみられるので、刃部として機能したとは思えません。剥離の稜線形態の細かな凹凸に添って摩滅が形成されているので、石などの硬い砥石で研磨したとは思えません。山田しょう氏が人の手に渡ることによって生じた手ズレの可能性も指摘しています。あるいは何か柔らかなやすりで研磨した可能性もあるのではないのでしょうか。

何故刃部にならないような部分に光沢や摩滅が認められるかは、現状では不明です。図1の場合、形状から横形石匙を意識したものでしょうが、やはり実用というよりは何か別の意味があるのでしょうか。

2. 図2は異形石器にみられた鋸歯状の加工(写真3)です。この鋸歯加工は、異形石器以外の縁辺にもみられます(写真4)。

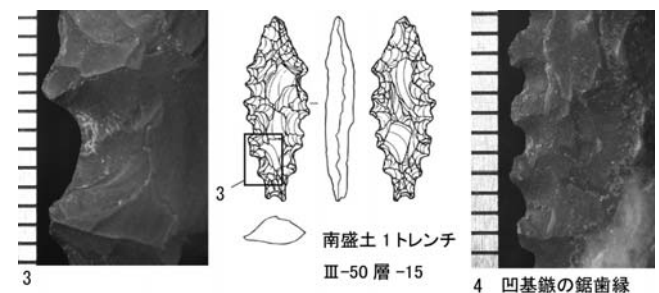


図2 鋸歯縁加工

縄文時代早期に、九州の熊本県瀬田裏遺跡、鹿児島県上野原遺跡、北海道では、垣ノ島A遺跡などから鋸歯縁石器が出土しています。一方で縄文晩期の中部・北陸などでは鋸歯縁・かえしの明瞭な石鏃、九州では石鋸が出現します。後晩期の場合は殺傷力を高める工夫でしょう。

東北地方では鋸歯縁加工は通常石器にはみられないので、何かの強調の意味で鋸歯状に加工したか、他地域の影響で製作されたのではと思われます。

図・写真はすべて青森県三内丸山遺跡出土資料

※ 実測図

図1:『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集

図2:『三内丸山遺跡34』青森県埋蔵文化財調査報告書第463集

より転載

※ 各写真は筆者撮影

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■縄文の使用痕	異形石器	高橋 哲 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第91回)	渡部明夫 …3
■考古学の履歴書	私の古代学覚え書(最終回)	桐原 健 …2	■考古学者の書棚『古代の日本 第7巻 関東』	福田健司 …4

考古学の履歴書

私の古代学覚え書(最終回)

桐原 健

最終回なので書き落した幾つかを脈絡もなく挙げてみる。

定年を迎えた平成5年の年賀状に「満期除隊・万歳」と書いたが学校との縁はまだ切れなかった。高校も大学も同期の岩下光雄さんの口ききで75歳まで上伊那郡辰野町にある信州豊南短大の非常勤講師となり毎週月曜日に中央自動車道で松本・辰野間を往復することとなる。辰野は満更知らぬ処ではない。中央道調査の折、樋口五反田や樋口内城館遺跡の発掘で数カ月滞在していた。その時大学はまだ無かった。

「東洋文化史」と「西洋文化史」の2コマだったが終りの3年間は「考古学入門」を講義した。30人程の受講があった。

日本の近世考古学は町人の道楽で育てられた閑学であること。「道楽」の解釈に力を入れたつもり。明治に入って法科・医学・工学の実学部門は薩長土肥勢力が占めたが閑学の系譜をひく考古学は敗け犬の旧幕側に任せられたこと。近代考古学はモース以来120年の研究史を持つものの、モノの背後に居る人間研究は戦後の60年に過ぎないこと。定説とされる事柄も一皮剥けばわからないことだらけ。そんな事を話して終っている。

定年後の人生計画で予定外だったのは長野県考古学会の7代目会長になったこと。前会長の森嶋稔さんは阿久遺跡の保存運動で苦勞された。就任8年頃から辞意を漏らしていたのを何とか慰留してきたが10年でダウン。

この後は樋口昇一さんが担ってくれる、最初は固辞されるだろうが最後の最後はウンと云ってくれる、楽観していたが今回は頑として首を振らない。平成8年から17年まで会長職を勤める。もうバブルは爆けて氷河期に入っている。若い会員が増えない。図書販売も頭打ち、火を消さないことだけが私の勤めと観念した。

この頃、飯田地域では群在する24基の前方後円墳のあり方と、飯田市座光寺地籍に存在したらしい伊那郡衙の究明が同時進行していた。

古代の科野は畿内と東国の緩衝地域で、飯田は関門。前方後円墳が内蔵している横穴式石室には畿内型・在地型・腰石を立てた韓国型がある。副葬品は武器・武具・馬具・装身具・鏡鑑。古墳に接しては殉殺された飾り馬の墓20基が発見されている。

飯田座光寺の恒川は弥生中期の遺跡として知られているが

同地籍は文治2年所見の近衛家領郡戸庄にも想定されている。恒川・郡戸は郡家に通ずるので早くから伊那郡衙に擬せられていた。バイパス通過で昭和52年から発掘が始まり、以来現在まで範囲を広くとっての調査が継続していて総柱の建物群、大型住居、大量な陶硯、「厨」と読まれる墨書土器、和銅銀銭、富本銭が出土している。

飯田には原田島村氏主幹の月刊郷土誌『伊那』がある。昭和28年から神村透さんの「下伊那における弥生文化」が連載されていることで知っていた。昭和50年頃から短いレポートを送るようになる。飯伊地方に係ることの条件が付いているので勢い題材は古墳・古代にしぼられる。

山頂立地・竪穴式石室・三角縁神獣鏡出土の善光寺平前方後円墳と比べれば飯田の古墳は国造制成立以降で殊にも馬を通じて中央と結びついている科野国造直氏に係る古墳であることは一目でわかる。科野国造の馬牧が御牧の前身である天平神護元(765)年新設内廐寮の牧に、科野国造氏の末裔である伊那郡大領金刺舎人八磨が信濃国の牧主当に就くに至った経緯を15編にくどくどと述べた。

塩尻の平出遺跡はV次調査後50人近くの土地所有者が承諾の印を捺して僅か1年で国史跡に指定された。資料館もできて、比較的容易に一応の形が整ったため文化庁は史跡の保存活用を忘失してしまったらしい。漸く思い出して動き始めた頃、農村では後継者不足で農地を手離さざるを得なくなり、遺跡の公有化が進んで史跡公園の実施が決った。平成11年に整備委員会が発足。考古学関係では戸沢充則さん、樋口昇一さん、私が委員で事務局には小林康男さんが入った。

史跡公園は縄文・古墳・平安時代のムラとガイダンス棟で、縄文のムラはガイダンス棟の真向いにあって中期中葉新道期の復元住居7軒が環状に並んでいる。上屋は定判の原始入母屋ではなく見映えのしない葺型だが時期と位置は愚直なまでに守っている。新道期の集落は長野県内では塩尻・俎原と平出、茅野・梨ノ木の3遺跡だけ。うち、俎原と梨ノ木は記録保存で既に消滅してしまっている。古墳時代は大型住居2軒と高床の倉庫1棟、平安時代は主屋と田屋と納屋のセットで中央に二ワを広くとってある。

ところで委員会だが、任期は大凡10年、本年が終了の年になる。その時を待たずして樋口さんは平成18年の1月に73歳で急逝してしまった。遺跡見学の時、「この調子だと70歳はクリヤーできそうだ」。「欲が出てきた。こうなったら傘寿を迎えたいもの」と私。樋口さんは返事をしなかった。以来5年、ただただ馬齢を重ねている。

略 歴	昭和8年1月3日	長野県松本市に生まれる
	昭和20年4月	長野県立松本第二中学校入学
	昭和26年3月	長野県松本県ヶ丘高校卒業
	昭和26年4月	國學院大学文学部史学科入学
	昭和30年3月	同校史学科卒業(日本史専攻)
	昭和30年4月	長野県高等学校教諭となる
	平成5年3月	定年退職
	(38年の間、14年間は県教育委員会文化課勤務)	
	平成6年4月	信州豊南短大非常勤講師
	平成21年3月	同大学非常勤講師 辞任

今回で桐原先生の連載は終了いたします。先生いろいろなお話ありがとうございました。次回からの連載もお楽しみに！

編集者

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 91

史跡宗吉瓦窯跡 ～ 香川県三豊市

渡部 明夫

史跡宗吉瓦窯跡は香川県の西部、瀬戸内海に大きく突出した三崎(荘内)半島の付け根付近に位置する。山条山とその東南の爺神山によって形成された小さな谷の西岸、山条山の東麓山裾に作られた瓦窯群である。遺跡は大正年間の開墾で発見されたが、調査は行われず、実態は長らく不明のままであった。

ところが、この山裾に農道建設が計画されたことから、県教育委員会が1990年度に試掘調査を実施し、瓦窯跡1基を確認した。

このため、三野町教育委員会は翌1991年度にその周辺を発掘したところ、新たに6基の瓦窯跡を発見した。この調査を担当した県教委の岩橋孝氏(当時)は出土瓦が藤原宮跡出土品に酷似することに気づき、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部(当時)に持ち込んだ結果、両者は同範瓦であることが判明し、宗吉瓦窯は藤原宮所用瓦を供給したことが明らかとなって、マスコミで大きく報道された。

遺跡の重要性に気づいた三野町教育委員会は、その後も調査を継続し、1995年度までに11基の瓦窯跡を確認すると共に、瓦窯跡全体の解明と恒久的な保存・活用を図るため、1996年度に白川雄一氏を埋蔵文化財専門職員として採用し、史跡化をめざした結果、同年9月10日、国史跡に指定された。

その後、宗吉瓦窯跡の調査は白川氏が担当した。1999年度には、全長約13mで当時日本最長であった17号瓦窯跡を調査し、宗吉瓦窯で最も古いこと、桙板を連結した模骨を用いて製作された行基式丸瓦・平瓦を、香川県最古の寺院の一つである三豊市妙音寺に供給していることなどを明らかにした。その後、2001年度の調査で、これらの瓦がTK217型式併行期まで遡ることが確認され、香川の瓦生産が7世紀中頃に始まったことも明らかになった。

また、2004年度までに24基の瓦窯跡を確認して、宗吉瓦窯が全国的にも大規模な瓦窯であることを明らかにすると共に、瓦窯が3群に別れ、初期の瓦窯3基(C群)は長大で

傾斜が緩い構造であること、その後A群(9基)・B群(12基)が作られて瓦生産が急激に拡大し、奈良県川原寺とそっくりな重弧文軒平瓦・凸面布目平瓦などを焼成し、その後藤原宮の瓦を生産したこと、A・B群の瓦窯が短小で急傾斜であることは、燃焼効率を高め、小型窯を多く作ることによって良質の瓦を短期間に大量に焼成することを目的としたことなどを明らかにした。

このように、宗吉瓦窯跡は7世紀における極めて大規模な瓦窯であり、地方における初期寺院の造営、中央の瓦生産技術の地方への伝播、宮殿所用瓦の地方での生産など、様々な問題を研究する上で非常に重要な遺跡であるといえることができる。

宗吉瓦窯跡の整備は、2001度末に基本計画が策定され、2002年度から整備事業が開始された。しかし、2006年1月1日に三野町が周辺6町と合併し、三豊市が誕生すると整備事業が大きく見直され、ガイダンス施設の縮小や一部計画の白紙化が決定されるに至った。さらに、これまで調査・整備を牽引していた白川雄一氏が同年12月4日に急逝し、国庫補助事業での史跡整備の遂行すら危ぶまれる状況に陥ってしまった。

このような状況のもと、筆者は白川氏と親しかったこともあり、県教委退職後、2008年度～2010年度に宗吉瓦窯跡の整備事業などを担当した。2008年度は国庫補助事業の最終年度に当たり、史跡整備と展示館の建設・展示、調査報告書の作成などを行い、2009年5月10日に三豊市宗吉瓦窯跡史跡公園とそのガイダンス施設である宗吉かわらの里展示館をオープンすることができた。

現在、ボランティア団体である「宗吉瓦窯会」が公園の環境整備とイベント(史跡まつり)を市から受託すると共に、展示館の運営にも大きな力を発揮し、市民の力で宗吉瓦窯跡の保存、活用を推進している。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは丹羽佑一さんです。



3号窯跡灰原出土瓦



三豊市宗吉瓦窯跡史跡公園

考古学者の書棚

「古代の日本 第7巻 関東」

杉原荘介、竹内理三 編／角川書店(1970)

福田 健司

9年前発掘現場を離れると同時に発掘調査報告書の大半を、とある西国の大学に寄贈した私の書棚には、著者からいただいた単行本、若い頃苦労して手に入れた本、図録、県史、市史などが残っている。その中でたまに読み返す本が、1970年角川書店より第5巻近畿編から翌年第9巻研究資料編まで配本された「古代の日本」第7巻関東編所収の甘粕 健「武蔵国造の反乱」である。配本順は違うが1要説、2風土と生活、3九州、4中国・四国、5近畿、6中部、7関東、8東北、9研究資料の全9巻である。値段は各巻1,300円であるが、9巻だけ1,800円で1～3カ月ごとの出版であった。

学生の頃、今の時代から考えると信じられないが、食事は日に2食の外食、銭湯(32円)へほぼ毎日行き、雑費も入れ1日500円で生活していた。この本を手に入れるため1日あたり20～50円切り詰めて貯め、配本日には駅前の本屋へ買いに行った。九州～東北編には、山、川、平野、国界、郡名、先土器時代～古墳時代主要遺跡、古墳、横穴、国分寺、国府、郡衙、主要寺院・神社などの「古代発掘多色刷り古代地図」付で買って来ると先ず地図を広げ、あれこれと古代に思いを巡らせたものだ。

なぜ数ある書籍の中からこの本を選んだかであるが、ほろ苦いと言うか悔やんでも悔やみきれない思いがあるからである。当時私は、専修大学で「隅田八幡宮所蔵画像鏡製作年代考」で知られる森幸一先生のもと古代史を学んでいた。時まさに70年安保の真只中で休講が多く、気が向けば授業に出るくらいでほとんど大学へ行かなかった。古代史森ゼミは、4年生3人、3年生3人ですべて男であった。たまに出席する私を含めやる気のない生徒ばかりで、先生は苦労されたはずである。ある時業を煮やした先生は、本を作ると言い出した。今から考えると先生は本など作る気はなく、やる気のない生徒を少しでも奮起させるため一計をめぐらせたのだと思う。

題名は確か「多摩川流域の古代」とかで、ある日有無も言わず執筆分担を読み上げた。私の分担は『日本書紀』安閑元年(534年)の条に書かれた、武蔵国造の地位をめぐる争った記事の「武蔵国造の反乱」についてであった。先生曰く、まず和島誠一・甘粕 健「横浜市史」第1巻(1958年)「武蔵の争乱と屯倉の設置」を読んでおけとの事であった。読んでみるとこの論文は、作為的に書かれた『日本書紀』の記事を古代史的に机上論で論ずるのではなく、考古学的成果を加え検討する事によって史実として浮かび上がらせる可能性を示唆していた。その時心から解釈論を駆使する文献史学より、考古学を学び古墳を掘りたいと思うようになった。

そんな時、運よく甘粕先生、久保哲三先生が行っている横浜市稲荷前古墳群の調査に参加する事ができた。その後、甘粕先生はこの稲荷前古墳群も含めた南武蔵、北武蔵の古墳の詳細な分析を行ない、先に述べた「古代の日本」第7

巻関東編で、国造の系譜や上毛野と南武蔵の関係を明らかにするとともに、争乱の性格や歴史的意義から共同体の変質と支配体制の再編・政治構造を言及している。その結果、武蔵の古墳の分布と消長・地名が、安閑紀の記事の内容と矛盾なく一致しており、この伝承が『紀』に記載された背景には、以外にしっかりした史実に基づいているのではないかと考えた。

当時この文献と考古学的成果をドッキングさせたダイナミックで魅力ある論文は、私だけでなく多くの考古学を志す者達を魅了した。その結果、益々古代史より考古学に興味に移り、発掘現場かアルバイトばかりしていたので、題名を出したものの卒論はほとんど書く気はなく、出せない状態であった。年を越し森先生からとにかく出せと(「後は何とかしてやる」とは言わなかったが)言われた。そんな訳で1カ月あまりで書いた私の卒論は、惨憺たるものであった。副査の中世史の松本新八郎先生、近世史の林 基先生らの鋭い突っ込みを、私でなく森先生が受けて立てくださった。よく審査が通ったものである。しかも評価はAで、すべて森先生のお陰である。さらに古代史を捨て考古学の道を選んだ不肖な教え子の就職にも、いろいろ骨を折って下さいました。1974年、東京都教育委員会埋蔵文化財係の採用試験を受けるにあたり、「お前は考古学専攻生に比べると不利だから」と言い大学長の推薦状をもらってくれました。

そのお陰か?東京都に入れ、毎日発掘現場で忙しい日々を送っていた1986年4月8日の朝、後輩からの知らせで亡くなられた事を知りました。享年68歳でした。その瞬間御存命中に何も恩返しが出来ず「しまった」と思った。その9年後、律令時代の土師器坏形土器は、国ごとに確立され一型式となるが、武蔵国だけ一国でありながら多摩川流域の「南武蔵型坏」と、荒川流域の「北武蔵型坏」にわかれる事から、国造職をめぐる争乱にはなんらか史実が反映していると結論付けた「武蔵国における古墳時代の問題点―武蔵国造の反乱―」を『月刊歴史手帳』(第23巻10号1995/10)に書き、少しは先生の学恩に報いた気がしました。

秋が深まるにつれお酒をこよなく愛され、紀ノ川を見下ろす蜜柑畑の緩斜面に静かに眠る独身であった先生のお墓へ一升瓶を持って行き、思う存分かけてあげたいと思うこの頃です。

アルカ通信 No.98

発行日 2011年11月1日

発行人 角張淳一

発行所 考古学研究所(株)アルカ

〒384-0801 長野県小諸市甲49-15

TEL 0267-25-0299

aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>